

小樽商科大学・小樽市共同研究
「小樽の歴史遺産の教育・観光への活用」最終報告書
【概要版】

2022年3月31日

本報告書は令和2年10月から令和4年3月まで、小樽商科大学と小樽市の共同で行われた小樽市内の歴史遺産の教育・観光での活用に関する研究の最終報告である。本共同研究では、小樽市に点在する近代遺産や文化施設を活用し、歴史をどのようにまち作りにつなげていくかを考察した。本報告書は、小樽市への修学旅行に関するアンケート調査の結果と、共同研究会で報告された歴史遺産の観光での活用事例から構成されている。

アンケート調査は、小樽市を修学旅行先に選んだことがある、あるいは選ぶ可能性がある地域の小中高等学校を対象に行われた。一口に修学旅行といっても、期間が短く、集団の規模が100人以下で、道内からの訪問が主の小中学校と、期間が長く、規模が200人以上で、道外からの来訪である高校は、まったく異なる顧客ターゲットであることが明らかになった。また、小樽での修学旅行は、通過型であり、宿泊は少ない。さらに形態としても、自主研修であり、学年が上がり規模が大きくなるほど自主研修が中心となる。修学旅行の目的は、小中学校においては、小樽そのものの学習というよりも集団行動のルール習得や体験学習が主であり、歴史遺産は教育そのものの中には活かされていない。他方で滞在時間が長くなる高校では、生徒の自主性に任されているため、文化遺産や歴史遺産への訪問は活発ではなく、一般の観光客と訪問ルートが変わらないことが明らかになった。つまり、小中高を通じて、小樽の歴史遺産は学習にあまり活かされておらず、他の訪問地域との差別化に成功していない可能性がある。

この問題への対応として、教員の引率による歴史遺産・文化施設への訪問を促すということが考えられるが、小樽は団体行動を可能とするインフラの整備が不十分であり、それが結果的に自主研修中心の旅行形態につながっている。修学旅行生は、他の観光客に比べて使用金額が小さいために直接の経済効果は小さ

いが、将来のリピーターにつながる小樽ファンの形成という点で、近代遺産や歴史への深い理解が可能となる学習旅行は重要な意味を持つ。インフラの整備や学習情報の発信などの試みは推進されるべきである。

続いて、歴史遺産の観光の活用に関する研究報告では、景観や土産物を中心とした従来型の観光だけでなく、「ニューツーリズム」と呼ばれる新しい観光形態の活用が提案された。そこでは、戦争遺産を用いたバトルフィールドツーリズムや、町の発展の中における様々な事件や事故のストーリーと歴史遺産を組み合わせたダークツーリズムの手法が説明されている。近代日本の発展の中における小樽の位置づけを確認し、観光にストーリー性を与えて滞在の長時間化を図る試みは、小樽案内人などによってもすでに行われている。これに加えて、榎本武揚の小樽市内での痕跡を辿る観光や現在はあまり使われていない戦争遺産を巡る旅は、一定の需要があると考えられる。これらの旅行は、海外では広く普及していることから、特にインバウンドに訴求するという点でも重要であると考えられる。小樽市内の歴史遺産は、市全域に点在しているが、現在の観光客動線は運河沿いからメルヘン通りに集中している。これは日本遺産の構成文化財が市中心部に集中していることにも現れている。観光導線を多様化し、小樽の主産業である観光の経済効果を全域に広げるといった観点やストーリー性を強調しリピート率を上げるという観点からも、ニューツーリズムの活用は今後の小樽観光の発展の鍵となるであろう。

本報告書の最後には、約 1 年半の間に行われた研究会および市内学校での教育活動の概要が添付してある。

新型コロナウイルス感染拡大期を経験し、小樽は一つの山を迎えていると言える。その中で、歴史遺産を教育に活用し市民のアイデンティティ形成を促すとともに、ストーリー性を強調することでさらなる観光客を呼び込むことができる。小樽の歴史遺産の教育・観光への活用はさらなる開発の余地があることが本報告書の結論である。